

# 朝を ひらく

永田 円了  
真国寺住職



出来事自身には何の意味もないからである。自分がその出来事にどう関わったのか。どう感じたのか。その出来事から何を学んだのか、が問われるのである。

20年ほど前、初めての本の出版に向けて原稿に取り組んでいた。「英語を学ぶ・原理原則」という堅いタイトルだった。数カ月かけて原稿用紙40枚ほどができた。

女房に一読を頼んだ。彼女は

数分で読み終え、原稿用紙を足下に放り投げて言った。「あなた、こんなもの誰が読むの？ ぜんぜんおもしろくない！」

ショックだった。だが、それを機に意識を改め、初めから書き直した。権威あるコトバを引用したり、学術的に格好良く書いたりするのはやめた。

ただ自分自身の体験を元に、これだけは伝えたい、ということに専念した。失敗談も隠さず満載した。半年後、その原稿が本になった。「間違ってたていいじゃないか、英語」(総合法令出版)。

まずは感じたまま、心のおもむくままに手を動かしてみる。自分をより良く見せたい欲求と

の対決儀式が終わると、不思議に自分でも思いもしなかった事柄が次から次へとコトバになっていく。だんだん肩の力が抜けていく。心が楽になっていく。頭で考えていた以上の内容が表れた。何かうれしくなる。こんな感覚を味わったことはないだろうか。

将来のビジョンをしっかりと持って、とよく言う。しかしこれも考えものである。頭の中でキツチリ青写真がでなければスタートできないようでは、この人生何のおもしろ味があるうか。

まずペンを持つ。手を動かす。エゴのブレーキが外れだし、心のアクセルのスイッチが入る。ペンと用紙だけでこれだけのことができる。ただ、何を書いているか分からないから書かない、というのが一番もったいない。

## 我欲と対決

# 書くことは心の解放

書くことは想像以上にたいへんな作業である。人さまの目に触れるとなると、余計に肩に力が入り、何度も書き直すことになる。評価を気にする気持ちが邪魔をして、なかなか筆が前に進まない。さてどうしたものか。「日曜日にお弁当をもって、立山へ登りました。途中足が痛くなりしましたが、なんとか頂上まで登りました」。小学生に作文を書いてもらうと、大体このように出来事の羅列になる。しかしエッセーはどうか。このコラムのようなエッセーにはテーマが必要となる。起こった